



2023年 7月13日
第 3 号

JR東労組 Yokohama

JR東労組横浜地本

発行人 助川一実
編集情宣担当
ホームページ



<http://www.jreu-yokohama1.jp/>

横浜地本第28回定期大会 (要旨) ②



助川執行委員長挨拶(要旨)

2月の定期委員会以降、21春闘の屈辱的敗北の教訓から、23春闘と夏季手当の要求満額をめざしたたたかいを積み上げてきました。夏季手当交渉では3年ぶりの黒字を達成したにも関わらず「利益が目標に達成していない」「順風満帆とは言いつれない」「最大の回答」「最終回答」と会社として社員の最大限の努力をしたかのようなうわべ面の「定型句」を強調しましたが、会社は組合員・未加入者の要求を退けました。新型コロナウイルスの次は世界規模で物価高となり当たり前の衣食住、人間らしい生活さえも一層厳しく圧迫する状況で、金を出さない会社。まさしく冷徹な資本の論理です。自民党と経団連など大企業の癒着政治によって会社の富は社会に還元されることはありません。組合員にも未加入者に対しても、自らの安売りはやめろと訴えて、年末手当と24春闘を勝ちとっていきたいと思います。

国府津運輸区における懲罰的日勤教育とのたたかいは、国府津運輸区分会の実践とJR総連に集う全国の仲間たち、各地方本部、OBの先輩方のたたかい、団結へと広げたたたかひによって、橋本さんは現在相模線のドライバーとして分会の仲間と共に活躍されています。ですが、当該職場の問題と当該管理者だけの責任に切り縮めてはいけません。職場では常に「支配の論理」が貫かれています。そこに気づかず見過ごせば、私たち自身が問題に対する傍観者や会社の加担者になってしまいます。会社は社会的にバシなければ何でもやる姿勢は今も昔も変わりません。宇都宮運輸区や豊田運輸区と私たちが連帯するのは誰でも例外なく攻撃的になるからです。私たちは会社に騙されたい。会社への幻想を持たない。困っている人が居たらみんなで助けあう。このことが一切の価値基軸になります。すべての組合員に周知徹底を図り真実を語り、一人ひとりが決意を打ち固め、組織強化・拡大を一層強化し、組織破壊攻撃を許さないたたかひを強化していきましょう。国家権力は様々駆使して憲法9条改悪、戦争をする国へとひた走っています。日本の経済を回すために大企業の生産性向上のために税制緩和や規制を緩和し優遇、個別の労働者には大増税で収奪を拡大する。軍事大国化の道は労働者の貧困と破滅の道をひた走っていると言わざるを得ません。人々の生活と暮らし、平和を守るために9条連と連帯し平和を希求する取り組みを広めていきましょう。

実践しなければ私たちの未来を切り拓くことは決してできないと思います。言い換えれば実践すれば未来展望は必ず切り拓かれます。共に頑張りましょう。



JR東労組 鵜ノ澤中央執行副委員長挨拶(要旨)

中央本部は3つのスローガンを掲げて第42回定期大会を開催し、200名の発言によってつくり出して頂きました。横浜地本からは国府津運輸区で発生した懲罰的日勤教育のたたかひで、檄の効果、初動が遅れ、起きた事象を放置してしまったり自己保身に對する教訓も語られました。大会を通じて、繰り返される日勤教育やハラメントが止まらないのは、経営側の官僚体質もあるが、社会的にも大きく報道されていて、もともとそのような意思が経営側にあるということ。そこに組合員とたたかえる組合組織があるかによって変わってきます。

2010年に広島島の西労と交流しました。「俺が法律だ」という広島運輸所のポテンシャル採用の所長が突如現れたとクローズアップされていましたが、教訓は別の所にもあります。西労からは「徐々に現象が現れてきたことによりあまり気にならず、所長が赴任し事象が行われた時には遅かった。役員だけで闘う状態になっていて、後ろに組合員が付いて来なかった。会社は団結することを非常に恐れる。だから役員だけでなく全組合員が、会社が行うことの一つ一つが攻撃である」と意識し、常に問題と捉えないといけない。常に安全が第一であり、それをつくることのできるのは労働者であり職場である」と話してくれました。職場活動をあらゆる場面でつくり出す意識と実践が、労働組合としてのチェック機能を高めること、労働者としての自覚、東労組への帰属意識をつくり、組織強化・拡大へと結びついていくと思います。

千葉地本の組織拡大の実践について共有します。18春闘から5年、30名以上組織拡大してきました。この5年は東労組としても、社会的にも転換点でした。どのような状況でも資本は常に金儲けの運動を止めません。災害復興などと言いつつ、利益を追求するのが経営です。私たちの労働運動、組織強化・拡大の運動は止めないことを意識していかなければ大きな波に飲み込まれてしまいます。簡単な話ではありませんが、少人数でも今の現状を共有して、次の一手を考えなくてはなりません。何が足りないのか気づかされたのは、松崎さんが講演した、寺子屋賃金話にある窮乏化待望論です。窮地に立たされたら、いつか未加入者も会社の暴走に気が付いて、東労組に入ってくれるというのは幻想であって、私たちが組織として働きかけて意識を変える運動をしなければ、相手の意識は変わらないということでした。また、一人ひとりのアンバランスがあるのが組織です。しかし、それを補いながらやること、適材適所を見極めて一丸となってきたから、役員側の意識が変わり、少しずつ組織拡大へと結びついています。ただ、全てがうまくいくわけではありません。加入する意思を示しているのに話をしない等、役員が常に組織強化と拡大ということを頭において運動をつくるという意思がないと一瞬のチャンス逃してしまつのが私の教訓です。JR東労組への帰属意識を高め、あらゆる妨害に立ち向かい、安全哲学の再確立と1万名組織の実現に向けて奮闘していきましょう。